

I. M. Lapidus; Muslim Cities in the  
Later Middle Ages,  
pp. 307, 1967, Harvard University Press.

古 林 清 一

イスラム社会は都市を中心とした社会だということはよくいわれることである。しかし、都市社会に関する本格的な歴史研究はまだ少ない。わずかに、C. Cahen の先駆的な業績がある程度である。(C. Cahen, "Mouvements Populaires et Autonomisme Urbain dans l'Asie Musulmane de Moyen Âge", *Arabica*, V—VI, 1958—59.)

C. Cahen はザンギー朝およびアイユーブ朝以前においては、イスラム世界においても都市の政治的独立への傾向が見られたことを指摘している。さらにアフダースとかアイヤールーンと呼ばれる一種の自衛団体が都市の住民によって結成されていたことを強調し、この時期においては、イスラム都市と地中海周辺のビザンツおよび南イタリア等の諸都市との間に、まだかなりの類似性が見られると主張している。いわば、イスラム世界がトルコ人によって制圧されるまでは、西洋都市とイスラム都市との間に本質的な差異はないとされるわけである。このような彼の主張をそのまま受容できるかどうかは問題であろう。しかし、少なくとも、トルコ人の支配を境として、イスラム社会なり、都市なりの発展の様相が大きく変化することは否定できない。この意味でトルコ人の制圧下におかれた時期の都市社会の研究が待たれていたわけであるが、本書が扱っているのはまさにこの時期、すなわち、マムルーク朝時代である。

著者 Lapidus はカリフォルニア大学助教授で、新進のイスラム学者であるが、本書は学位論文を骨子としたものであり、なかなかの力作である。考察の主たる対象はマムルーク朝時代のシリアのダマスカス、アレppo等の都市社会である。そして、歴史学の立場からだけでなく、社会学の立場から問題に接近しようとしており、これが本書の大きな特色となっている。

前置きにおいて、彼は本書の主題を次のように述べている。すなわち、マムルーク・レジームとその支配下に置かれた都市社会との関連を考察することをめざし、さらにイスラム都市の特質をヨーロッパ都市と比較しつつ把握することをめざすことである。そ

して、都市社会を構成する種々の社会層相互の関連を追求することによって、この問題に接近しようとしている。以下、章を追って内容を紹介していきたい。

第1章の表題は「マムルーク帝国における都市の歴史」となっている。この章はマムルーク朝史の初心者のために書かれた導入的部分と考えられ、本書の中心的部分とは考えられないので、紹介の必要はない。今までになされた種々の個別研究の最新の成果を巧みに取り入れて書かれ、かなり高度のマムルーク朝社会経済史の概説となっている。ただ惜まれるのは、表題から期待されるように、都市の歴史的発展そのものをダイナミックに把握するという作業が行なわれているわけではなく、焦点が必ずしも絞られているとはいえず、マムルーク朝全体の社会経済的発展の叙述に終わった感があることである。従って、次章以下との論理的な関連が今一つはっきりしない結果に終わっている。

第2章は「都市生活におけるマムルーク・レジーム」というタイトルになっている。ここではマムルーク・レジームがその支配下に置かれた都市とどのような関連をもったかが説かれる。マムルーク朝においては、官僚制がかなり発達していたことは否定できないが、地方都市に対しては中央政府の力はあまり及ばず、その地の総督等のエミール勢力がかなりの独立性を持っていた。そして、国家権力の私的占取がかなり行なわれ、総督その他の有力家族の力が地方都市では決定的な力を持っていた。では、このマムルーク勢力が都市において優越していたとすれば、それは何を基盤としたのであろうか。

そこで、マムルーク勢力の都市における経済力の問題が問われなくてはならない。まず、彼らは都市の商工業の最大の顧客であり、さらに租税収入の一部を現物で受取ったために、余剰の穀物を都市の穀物市場に放出し、都市の食糧補給の死命を制した。さらにタルフと呼ばれる強制販売の政策をとり、種々の商品を強制的に住民に売りつけ、そのことによって、都市経済の全分野に対して、支配力を持つようになった。そのみならず、彼らはその農業収入を投資して都市の浴場、市場、商人宿等の所有者となる。彼ら、ことにエミールは公共事業や運河の工事、築城等のために多数の労働力を駆使することができた。また、木材、石等の建設資材の供給はスルタンないしエミールたちによって制せられていた。

このような経済的優位を基礎としつつ、マムルークたちは、自らは外国人であったにもかかわらず、都市生活の内部に深く浸透してゆき、被治者たちとも密接な関連を持ち、有力者たちとの通婚関係を結ぶこともあった。また彼らは都市に対する水の供給、道路の整備、運河の整備、さらには宗教施設への財産の寄進等を行ない、都市の存立に欠くべからざる存在であった。

以上、述べてきたようなラビダスの指摘はきわめて、興味深いものである。マムルークはトルコ系ないしチェルケス系の外国人出身の軍人階級である。そして、世襲される場合は稀であり、絶えず、新しく外国より供給されつづけた存在であった。このようなマムルークのイメージから彼らはその治下の住民からはきわめて隔絶された存在と見做されるのが普通であったといえよう。ラビダスはマムルークが都市生活の内奥にまで深く入りこんでいることを指摘して、今までの通念に批判を加えているのであって、この点は高く評価されてよい。さらに、都市経済におけるマムルークの果たした役割の大きさも彼の業績によって、初めて明らかにされたといえる。この章は論旨も比較的明解であり、ユニークな指摘にも富み、全篇中の白眉といってよい。

次の第3章は前章で述べられたマムルークの支配下に置かれた都市社会の分析がなされる。まず、都市の住民の階級構成が分析され、マムルーク、有力者、平民、ルンペンプロレタリアートの4つに分けられる。

次に都市を構成する要素である区の構造が分析される。都市はこの区を構成単位とするが、これは同郷あるいは同宗派等を結合の基盤として成立し、徴税の単位となり、犯罪の場合には連帯責任を負い、さらには共同防衛にも従事するものであった。そして、シャイフとかアリーフと呼ばれるリーダーに率いられて小さいながら一つの共同社会をなしていた。

では、この他に都市の住民を互いに結びつける組織はなかったのであろうか。そこで、まず、市場を基盤とする社会結合の問題が問われる。しかし、西ヨーロッパの都市で見られるような商人ギルド、職人ギルドの形成はウラマーや国家権力の抑圧のために阻止されてしまった。さらに、スーフイーの教団等が主として下層の民衆の間で形成されたが、それほど、都市生活の中で大きな役割を果たすことはなかった。

このように、都市の住民の間で区の連帯を越えたような、全市民を打って一丸とするような社会集団の形成が阻止され、さらに中央政府による官僚制による支配が未発達で全都市的な問題を処理する能力がなく、小さい共同社会が分立しているのが都市の実情なのである。

では、都市全体を統合すべきものが何も存在しなかったのであろうか。そこで、大きくクローズアップされるのがウラマーの役割である。彼らはイスラム法、神学等の素養を持つ一種の知識階級である。そして、カーディ、法学者、説教師等の職につきイスラム社会の宗教上の指導者となる人々である。しかしながら、イスラム法の性格上、宗教面のみならず行政的、経済的側面においてもイスラム社会の指導者たるべき地位にある。

そして、国家に仕えて国庫の役人、市場統制官、書記等になり、宗教以外の問題にも関与し、きわめて多岐にわたる社会的役割を果し、都市の全ての問題に関与する。その上、ウラマーは他とはっきり区別されるような特定の社会階級ではない。官僚、手工業者、商人等を同時に兼ねることも多く、他の社会層と重複し合う存在であり、下層階級とも密接な関連を保ち、都市の全ての人々と接触し得た。その上、社会的出自の面でもマムルークの子孫や商人等を初めとして種々の社会層から供給される。このようなウラマーの社会的地位から都市社会の統合者としての局面が出てくるのである。さらに統合者としてのウラマーの地位は法学の学派に見られるようなウラマーの周辺に結成される宗教的な集団の存在によって強化される。

要するに、この章ではイスラム都市における全体的統一性の欠如とそれを補うものとしてのウラマーの存在が指摘されている。この主張に関して、個々の局面は今までにかなり指摘されていることは事実である。区の閉鎖性はよく指摘されていることであるし、ギルドの不在については、本書の扱っているより若干古い時代についての史料であるゲニザ文書により S. D. Goitein が論証している。(S. D. Goitein, *Studies in Islamic History and Institutions*, Leiden, 1966.) さらに社会の統合者としてのウラマーの役割についても、本書とは必ずしも同一の視点からではないが、カール・マンハイムの知識社会学の立場に立ちつつ、初期イスラム社会の分析を行なった M. Watt がかなり似かよった主張をしている。(M. Watt, *Islam and the Integration of Society*, London, 1961.)。しかし、都市社会の統合者としてのウラマーの役割を詳細に解明したことはやはり優れた業績とすべきであろう。

第4章では都市の有力者の問題が扱われる。マムルークたちは都市の存立にとって不可欠の存在であった。すなわち、戦時における都市の防衛と都市に対する食糧の供給は彼ら以外の者にはなし得なかった。しかし、このように軍事面と経済面において都市を制していたマムルークたちも都市生活の全ての問題を独力で処理し得たのではない。そこには一種の協力者が必要となるのであって、その任務を遂行したのが都市の有力者と呼ばれる人々である。具体的には大商人とウラマーである。

まず、前者より論ずることとする。卸売業者、国際商業や奢侈品取引に従事するような大商人たちはマムルーク・レジームと密接な関連にあった。すなわち、スルタンたちに対する貸しつけ、徴税業務、国家の貨幣政策等への参与によってである。さらに、国家が積極的に商業活動に参加するようになった時代には、その奉仕者として外国貿易や奴隷貿易に参加し、マムルーク・レジームとの結びつきは一層強化される。

次のウラマーにおいては、もっと明瞭に都市の有力者としての姿が浮び上がってくる。彼らは独自の軍事力、経済力を持たなかったため、マムルーク・レジームに依存しなくてはならなかった。有力なカーディ、市場統制官、スーフィーのシャイフ等は政府の任命下にあった。その上、彼らのなかには、国家に仕えて官僚となるものも多かった。しかし、同時にマムルーク・レジームを正統化することによって両者は相互に扶助し合う立場にあった。シャリーアで認められない非合法の税を課す際や内乱の際に民衆の支持を得るためにはマムルークたちはウラマーの支持を必要とした。ウラマーは民衆にマムルーク・レジームに協力するように説くことができたからである。いわば、マムルーク・レジームを都市の一般民衆と結びつける役割をウラマーは担っていたわけである。社会の他の階級と重複し合い、収入の面でも必ずしも政府よりの給料のみに依存しなかった彼らは都市社会のすべての階級の人々と接触を失ってはいなかった。このようなウラマーこそマムルーク・レジームと都市の住民との媒介者として機能し得たのである。

本章では商人とウラマーの都市の有力者としての役割が論ぜられている。媒介者としてのウラマーの姿は比較的良好に表現されている。しかし、商人については、事実としてウラマーほどの役割を果たさなかったことによるのであろうが、媒介者としての像は十分に表現されていない。レジームと商人との結びつきはよく示されているが、都市社会なり都市の一般住民と商人との関連があまり指摘されていない。従って、媒介者としての商人の像があまりよく表現されていないのが惜まれる。

第5章は都市の民衆および民衆運動に関する問題が扱われる。今までに述べてきたように、イスラム都市はマムルークと都市の有力者、ことにウラマーの二者の提携の上に成り立っている。それでは、この二つのエリート以外の都市の住民はどのような状態にあったのかが疑問となるであろう。マムルークとウラマーの二つのエリートの提携を基礎とする社会秩序は民衆にとっては、必ずしも満足なものではなかった。彼らのこの不満は主として暴動の形をとって表現された。民衆の不満を行動へと駆りたてた第一のものは経済的不満であった。店主たちは営業の拒否、市場の閉鎖等に訴えた。しかし、一般の民衆たちは食糧危機や物価暴騰に対してはしばしば暴動に訴えた。さらに恣意的課税に対する抗議行動も行なわれた。そして、民衆のこのような行動はエジプトよりシリアの諸都市でより活発であった。しかしながら、その要求を十分にマムルーク・レジームに浸透させるためにはウラマーらの都市の有力者の指導が必要であった。民衆の間には市場を基盤としたような組織は十分に発展していなかったため、ウラマーたちの支持に結局は依存せざるをえなかった。従って、マムルーク・レジームに対する彼らの反

抗もこのような点に限界が見られた。

このような民衆運動の一つの例としてダマスカスにおけるズアルと呼ばれる集団の動きは興味深いものである。これは15世紀の末にダマスカスの郊外の区や周辺の村で組織された一種のギャングのことである。彼らはカビールと呼ばれる指導者によって率いられる。彼らは不正な役人や不当な課税に反抗し、区の利益のために戦ったが、他方では、区ごとの争いによる混乱を引き起こしたり、区の住民に対する掠奪行為も行ない、区に対する有害な行為も行なった。ここにズアルのもつ二面性が見られるわけであるが、マムルーク・レジームに対する態度も二面的である。ズアルはマムルーク・レジームに対する反抗も行なったが、同時にその武力はマムルークたちに利用された。マムルークの正規軍に対する予備軍として、ことに戦時の都市において動員された。結局、ズアルは反体制的な活動を示すことはあったが、最後には体制の中に組み込まれてしまう運命であったのであり、真に革命的な民衆運動にはなりえなかったのである。

カイロのズアルはダマスカスのものにくらべてあまり組織されていなかった。そして、罪人、盗人等より構成されていたため暴力的傾向が強かったが、結局はマムルーク・レジームの中に組み込まれてしまった。さらにシリア、エジプトの諸都市にはハラフィーシュと呼ばれる一種の乞食の集団が存在した。彼らも一時は暴力的傾向を示したが、15世紀以後はスルタンやエミールの統制のもとに置かれるようになった。

本章では、民衆運動の持つ暴力的傾向とその限界が指摘されているが、ズアル等についての研究は今まであまり行なわれていない。その意味で注目されてよい。

最後の第6章は結論とされ、イスラム都市の性格づけがヨーロッパの都市との対比のうちになされる。彼はイスラム都市とヨーロッパ都市とを比較する際に中央政府の官僚制的支配のもとにある前者と自主独立のコンミュンとしての後者というよく知られた観点には立たない。彼によればイスラム都市社会の特徴はその未分化さにある。ヨーロッパ都市では階級間の区別が厳然としており、制度や機構の整備がきわめてすすんでいる。しかるに、イスラム都市社会では階級間の区別はかなりあいまいであり、例えばウラマーはすべての階級と密接な接触を保ち、彼らと重複し合う。また、社会結合も法学の学派、区等のそれに見られるように階級間の障壁を越えてなされる。

さらに、イスラム都市社会においては官僚制的な支配はきわめて未発達である。都市の細部にわたる諸問題はこれによっては処理し得ない。そこで、それを代行するのが個人間の結びつきであるパトロネジである。このパトロネジによる支配関係がイスラム都市における人間関係の中核となる。このパトロネジはマムルークを中心にして結成され

る。これには、マムルークと都市の有力者との間に結成されるものとマムルークと都市の下層階級との間に結成されるものとの二種がある。前者はマムルークの都市支配の基盤となり、後者は民衆の反体制的な運動を抑圧するための手段となった。このようにして、イスラム都市はマムルークによって死命を制せられ、社会の変革は困難となった。このような点にイスラム都市の特質があるとされるのである。

最後に全体的評価をしておきたい。冒頭で著者の提示した主題のうち、マムルーク勢力と都市社会の関連の把握の問題については成功している。マムルーク勢力とウラマーとの提携という点を明らかにしたことは都市の社会構成の理解に大きく貢献している。さらにイスラム史の観点からも、マムルーク勢力と正統派イスラム勢力との癒着の問題の理解に貢献している。しかし、イスラム都市をヨーロッパ都市と比較して、その特質を把握しようとする課題は完全に達成されているとはいえないであろう。彼は中央政府の官僚制的支配下にあるイスラム都市と自主独立のコンミュニオンとしてのヨーロッパ都市という通説的な二分法の批判を随処で主張している。しかし、結論の箇所では彼の展開したような主張が通説に対する有力で説得的な反論となりうるかはやはり疑問であろう。

実証的な事実の裏づけという点は十分になされているといえよう。このことは本書の膨大な注が何よりもこのことを物語っている。しかし、これらの事実を理論構成する操作は必ずしも十分だとはいえないと思う。一例を挙げると、第4章で都市の有力者としての商人について論じているが、その際に例示されているのは殆んど本書の中心舞台であるシリアではなくエジプトの外国貿易商人であり、スルタンとの関係の指摘に重点が置かれている。都市社会の研究という観点からは、むしろ、ダマスクスやアレクサンドリア在住の商人たちと総督あるいは一般民衆との接触という点に中心を置いて分析すべきであろう。もう一つ疑問点を挙げておこう。本書ではスーフィー教団の役割はごく簡単に扱われている。しかし、この宗教運動と市民層との関連は従来も注目されてきた点であり、この教団はこの時代の都市の社会構成の上でもっと大きな比重を占めていたのではないかと気になるのである。

しかしながら、一方では実証的事実の裏づけを持たないきわめて大まかな概説と他方では何の理論をも持たない微細な個別研究をしか今までのイスラム社会経済史の研究は生み出していない。このような状況のなかで、本書のように両者を結びつけようとする試みがなされたことは高く評価されるべきである。